

ホテル・ロザリー。泊まらない人も庭とレストランを目指す。



今年の5月に「Hôtel Rosalie (ホテル・ロザリー)」がオープンしたのは、13区のシスター・ロザリー大通り。なんとなく愛らしい響きの通り名は19世紀に活動したロザリーという修道女に由来している。地下鉄のPlace d'Italie (イタリア広場) 駅から徒歩3分と便利な立地にあり、60室の4ツ星ホテルとしてだけでなく、宿泊客でなくても利用できる緑あふれる庭に面したカフェ・バー・レストランとしても知っておきたい。

ホテルの入口はプラタナスの並ぶ通りがあるが、建物は奥まっている、しかも庭とバー・カフェ・レストランは地下にあるため、ちょっと秘密の隠れ家的気分が味わえるのだ。朝食、カフェ、ランチに活用でき、また金曜と土曜は夕方からカクテルと軽食も。メニューはヘルシー&グルマンといういまの時世が求める内容である。キヌアボール、オレンジ色のレンズ豆の煮込みとバスマティライス、カラフルサラダ……。1日のスタートに、緑に囲まれてカフェだけ一杯! という使い方もできる。もちろんラテは植物性ミルクで。

この庭、レストランを宿泊者が自由に楽しめるのももちろんだが、4階のシークレットガーデンという宿泊者だけが利用できるルーフトップもホテルは隠している。クラシックな彫像に囲まれたシークレットガーデンには、なぜか赤いブジョーが1台。立ち往生し、草花にすっかり覆われたといった風情で……。ホテル・ロザリーの主演は自然なのだ。

ホテルの内装を担当したのはマリオン・メランダー。パリでは過去にアメリカン・ピシャールのバスターユのプティックを手がけている。このホテルでは庭と室内の境を曖昧にする、というアイデアでインテリアを作り上げた。自然を取り入れる、というのはオーナーであるジョリス・ブルネールの希望だったという。また、大理石のようなノブールな素材をチープなイメージの素材とミックスし、家具もいくつかは彼女がデザインして、と、パリ市内のホテルとしてはなかなかユニークな客室だ。また1階のロビーホールに置かれたガエ・アウレンティのソファと肘掛け椅子は、彼女がクローバーのモチーフを描き、フランスのファブリックメゾンThevenonに特注した布でカバー。ホテルに入った瞬間に目に入るこのファブリックは、優しく目を和ませ、快適な滞在が待っているという期待を抱かせる。

